

# 世にも不思議な物語

中岡俊哉



潮文社新書

## 世にも不思議な物語

### 中岡俊哉

1925年 東京大塚生れ。

中国芸大で中国演劇史を専攻。北京放送局在職。在華生活15年。帰国後文筆生活に入り、現在、外電通信社の編集・訳筆を担当のほか新聞、雑誌に怪奇物などのノンフィクション読物を執筆。主著「戦場の怪」「世界の怪事件」「S・Fスリラー」「この謎はまだとけない」「祖父・雲右衛門」らいたあず・ぐるうぶ「背い雲」代表。

現住所 千葉市神明町 14 番地

---

昭和45年 9 月25日発行 新装版

¥ 280

編著者 中 岡 俊 哉

発行者 小 島 米 雄

印刷所 白泉堂印刷(株)

発行所

〒160  
東京都新宿区坂町23番地  
電話東京(357) 3261(代表)  
振替・市京 69107

潮 文 社

---

世にも不思議な物語

中岡俊哉



まえがき

火星ロケットや金星ロケットが射ちあげられ、人類の宇宙遊泳が行なわれている現代、この科学時代の現代はまた、ミステリーの時代だとも言えそうです。

新聞をひろげて見ても、テレビのスイッチを入れても目につくのは、不快なニュースと謎にまつまれたニュースばかりです。例えば、次の数字ですが、これはベトナムでの「戦果」です。

昨年一年間の死傷者数を、アメリカは合計一千三百人と発表しているのに対し、ベトナムは合計一万九千二百余人と発表しています。果してどちらが本当かわかりませんが、なんと奇怪な数字でしょう？

こうした偽りの謎とちがうのが、世にも不思議な出来事です。昨年一年間に、私だけが入手した世界各地で起きた怪奇事件は百八十数件にのぼっています。

日本でも昨年「飛行機の謎の蒸発」「新幹線にゆうれい」「人間蒸発」など、警察も調べよ

うのない怪事件が起きているのです。

外国での例を見えますと、

一月―恐竜のタマゴ発見、写真に写った謎の宇宙人。二月―時計人間発見、犯人を当てた靈感少年。三月―死後の世界を見た男、ビルを倒した怪力の巨人。四月―百年前のゆうれいが人殺し、ビルの床から謎の火。五月―ラオスに半魚人、身体が固まる奇病。六月―割れたフロント・ガラス、漁師をさらった怪鳥。七月―地底に沈んだ家、突然背中いきり傷。八月―石の雨、夫人を救った死んだ犬。九月―宙に浮いた家、三本足のブタ。十月―人をおそった怪昆虫、ドバ湖に恐竜。十一月―火事を予知した坊や、爆発した庭石。十二月―重油の雨、角のあるミイラ発見。

これは、怪奇カレンダーとでもいうような意味で月別に一部をならべて見たまでですが、どれも科学時代のものとは思えないものばかりです。

私が、こうした怪奇現象に深い興味をもちだしてからもう十数年になりますが、いまだに信じきれないでいます。そもそもこうした現象に興味を抱きはじめてのも、在華十五年余の生活で、数秒前まですぐ脇で一緒に戦っていた戦友が蒸発したように消えたことと、この手で死体を葬った親友に真昼間道のまん中ですれ違ったことなど二、三の怪現象に出会ったためです。

また、本書の中に収めてあります死んだ戦友に東京駅で出会ったこと、テレパシー通信実験に幾度か成功したことなどが、こうした怪奇物を収集し、執筆する動機ともなっているわけですが、それは、科学時代、合理主義時代といわれる現在にも、人智では解けないものがあることを知ってもらいたいと思ったからです。

かといって、私はこれらを否定する論拠を『科学者』のようにもっていませんし、肯定するものも『心霊学者』のようにもっていません。ですから、私の場合は見聞したそのままをお伝えするだけです。

従って、科学者の書かれた『怪奇』書のような科学的推理、推論のない、楽しみながら世にも不思議な出来事を知って頂こうとする読物なのです。

しかし、だからといって、本書に収めてある謎と怪奇は空想物語や創作物語ではありません。すべてが、外国の電波にのせられた物であり、東南アジア、東欧、欧州などで出版されている新聞・雑誌から取材したものです。また、数本は現地にいる友人から、根拠となる資料と一緒に送られてきたものばかりです。

めまぐるしい近代生活での、一服の清涼剤のつもりで、どうか気軽に、楽しみながら読んでいただきたいと思います。

なお、本書出版にあたって御援助下さった潮文社編集部の方々に心から感謝申し上げます。

一九六六年 三月

中岡俊哉



## 目次

|                    |   |
|--------------------|---|
| まえがき……………          | 三 |
| 生まれ變つて殺人犯を逮捕……………  | 二 |
| 恋人を手招いた死霊……………     | 七 |
| 不思議な不思議な話……………     | 二 |
| アメ玉を買う女……………       | 五 |
| 首なしの男……………         | 六 |
| 20年後のゆうれい……………     | 三 |
| 死者に足を引かれる……………     | 六 |
| 絵を描いた死んだ女……………     | 四 |
| 母親の危急を救った息子の霊…………… | 四 |
| 戦場のスリラー……………       | 五 |
| 怪魚の水死体……………        | 七 |

|                  |    |
|------------------|----|
| 東京の幽霊館……………      | 七四 |
| お寺のミステリー……………    | 八〇 |
| 墓掘り女……………        | 八六 |
| 奇怪な宇宙の怪物……………    | 九五 |
| 死後20時間目の手紙……………  | 一〇 |
| 身体が固まる奇病……………    | 一五 |
| 写真に映った湖底の死体…………… | 一九 |
| 百二歳の産婦……………      | 二三 |
| 不思議な私の経験……………    | 二六 |
| 予言する人びと……………     | 三九 |
| 原始人からターザンまで…………… | 四一 |
| 医学を超えた不思議な話…………… | 五三 |
| 人間蒸発……………        | 五九 |
| 呪いの石の柱……………      | 六四 |

|           |     |
|-----------|-----|
| 赤犬に呪われた娘  | 一〇六 |
| 宇宙怪物か四次元か | 一〇七 |
| 車を溶かした謎の光 | 一〇八 |
| 謎の怪植物     | 一〇九 |
| 殺人怪光線     | 一一〇 |
| 毒ガエル・毒グモ  | 一一一 |
| 二女優のミステリー | 一一二 |
| 怪人・超人・珍人  | 一一三 |
| 謎の火吹き人間   | 一一四 |
| 異常出産者     | 一一五 |
| 耳に目のある少女  | 一一六 |



## 生まれ変って殺人犯を逮捕

一人の人間が死んだとき、その魂はどうなるのだろうか？

死後の靈魂については昔からいろいろの学者が研究を重ねてきているが、いまだにはっきりした結論は得られていない。

ところが、昨年十二月この死後の靈魂の存在を実証するような事件が、トルコのアダナ市という所で起こった。

以下は、この事件の調査を続けているトルコ精神療法学会議長ゲシリリヤンゲル博士の手記によるものである。

×

×

トルコのアダナ市の郊外に住む作男のネスム（四二）は、知らせを受けたとき、無論そのことを信じはしなかった。

二歳になったばかりの甥のイスミルが、「ぼく、アピドだ」といったというのだ。

しかも、そのことは叔父のネスムに聞けばわかるという張ってきかないというのだ。

「そんなバカなことってあるもんか！」

ネスムは頭から打ち消してかかった。だが、アピドという名前には、まんざら覚えがないわけではなかった。

覚えがないどころではない。ネスムの家の近所に、スソルマイス家という大邸宅がある。その家の先代の主人がアピドといった。

ネスムは五年ほど前、頼まれてその農園で働いたことがあった。主人のアピドは大変やさしい人で、よくネスムたちを呼んで一緒に酒を飲んだりしたものだ。

だが、そのアピドも、二年前に急死し、現在スソルマイス家では、二度目の妻だったハティス未亡人と十七歳になった先妻の娘クルチエリンとが、淋しく暮らしているだけだ。「イスミル、どうしたんだ？ 人真以なんかして、だめじゃないか！」

叔父のネスムが駆けつけたとき、まだ赤ちゃんけのぬけない顔のイスミルの眼が急にキラキラ輝き出した。

「よくきてくれたね、ネスム君、誰も私のいうことを信じようとしなないんだ」

イスミルがそういったのだ。かん高い子どもの声で……。しかもその口調は完全に大人のそれだった。

ネスムは、ゾーツと背筋を冷たいものが走るのを感じ、思わずきいた。

「お前は、誰だ？」

「なにをいっているのだ。私だよ、アピドだよ。スソルマイスのアピドだよ。ホウ、お前にも土地を貸したことがあるじゃないか」

ネスムは呆然となった。

「私は殺されたのだ。むごたしく叩き殺されたのだ。私は、その殺した奴に復讐してやりたいのだよ。私を連れて行ってくれ。私と、私の家へ一緒に行ってくれないか」

アダナ市の雑貨商ネスムの甥イスミルが不思議なことを口走ったという噂はたちまち市中に拡がった。

もうこのままほうっておくわけにはいかなかった。ネスムは警察に立ち合いを頼み、イスミルをスソルマイス家に連れて行った。

「おお、クルチュリン！」

出迎えた「娘」のクルチュリンを見るなり、イスミルは叔父の手を振りはなすと、親しげに

クルチュリンの手をとった。

「あのおう 母は中でお待ちしております」

クルチュリンは当惑げな顔つきで、ネスムや警官にいった。

「いや、馬小屋へ行こう。私は一刻も早く犯人をあげたいのだ」

イスミルのアピドは興奮したように叫ぶと、さっさと裏の馬小屋へ向った。叔父のネスムもあとを追った。未亡人も警官も、そしてつめかけた報道陣もそのあとに続いた。

娘のクルチュリンと執事のマスターアファに支えられたハティス未亡人の美しい顔は、心持ち青ざめていた。

「忘れもしない、二年前の一月三十一日の朝だ」

イスミルのアピドは、薄暗い馬小屋の中でその当時を思いうかべるように語り出した。

「朝食後、私がロビーにいと、この男が私を呼びにきた」

イスミルは、人のかげに隠れていた馬丁のラマサンを指さした。

「馬の様子がおかしいというのだ。私は早速ここにやってきた。丁度ここだった。ここに私の愛馬「白雲号」がいた。私も、白雲号のひずめをこうやってかみこんで調べていたとき、私の後頭部は、重い鉄棒でうしろから打ち砕かれたのだ。そのとき、この小屋にいたのは、ラ



マサン、お前だけだったな」

イスミルの言葉が終わるか終わらないかに、馬丁のラマサンは、ひげ面をクシャクシャにしてその場に泣き崩れた。

「おれが悪いんじゃないねえ！ おれは頼まれただけだ！ マスタアファの野郎が金をくれるっていったもんだから……」

「違う！ ウソだ！」

真青になった執事のマスタアファは、慌てて逃げ出そうとした。だが、周囲を囲んでいた報道陣がそうはさせなかった。カメラのフラッシュが彼の上をおおった。

「そうだ。マスタアファはラマサンに命じた。だが、私を殺させた本当の犯人はほかにいる」  
イスミルのかん高い声が馬小屋に響いた。

「マスタアファをそそのかし、ラマサンに手を下させた奴、私の財産を根こそぎ自分の自由にしようとした奴！」

イスミルは鋭い眼つきで、周囲の人びとをじっと見廻した。

「そいつが、いまこの小屋の中にいる！」

イスミルは右手の人さし指を静かに出した。